

図18 中間4山車町内の年齢階層別人口の推移

町内人口3分類のグラフを比較すると少数5山車町内がかなり速いスピードで高齢化が進み、山車巡行の中心となる生産年齢人口が大きく減少していることが分かる。この結果は、3.4各町内の年齢構成の分析結果でも述べているが、少数5山車町内の住民は中高生も20~30歳代も殆どいないと回答している割合が6割近くにもなっていることから裏付けられる。

年少人口の構成比は、10年間であまり変化がないように見えるがこれは全体の人口が減少してきている中での構成比であり、実数は明らかに減少傾向にあるものの生産年齢人口に比べて急激な減少ではない。

多数4山車町内は、若い単身世帯も多いことから少数5山車町内に比べて緩やかに老年人口が増加し、生産年齢人口が減少している。しかし、年少人口の構成比の減少度合い（角度）を示す線を見て分かるように地区内人口が町で最も多い地区ではあるが子どもたちの減少は急激に進んでいる。平成17年の年少人口から実に300人も減っている。多数4山車町内の中でも「義公山」を保有する柏町・南浜町・南が丘の減少数が最も多く平成17年の半分以下まで減少している。

また、中間4山車町内とも比較してみると、少数5山車町内の老年人口の増加率や生産年齢人口の減少率よりはまだ少ないものの着実に人口減少は進んでいる。老年人口は、ほぼ多数4山車町内の増加率と同じではあるが、実数で見ると老年人口数は殆んどここ10年で変わっていない。中間4山車町内の場合は、実数で年少人口と生産年齢人口の減少傾向が大きくこの結果に影響しているのである。

13基の山車を保有する町内全体で見ると、老年人口の増加率は、多数4山車町内と中間4山車町内とではほぼ同じように推移している。

5. 観光入込客数の動向

江差町の年間観光入込客数を姥神さんが開催される上期（4月から9月）と下期（10月から3月）に分けて、平成21年から平成30年までの10年間の推移について調査した結果が図19⁽¹⁾である。

平成21年には上期で353.8千人もの観光入込客が江差町に訪れていたが、10年後の平成30年には268.5千人まで減少している。しかし、北海道新幹線開業の効果が出たのか平成28年には道外入込客が急増し、前年比で7万人以上増加している。それに伴い道内入込客は減少化傾向にあり、平成24年の道内入込客数286.3千人をピークに平成30年は実に118.6千人まで、6年間で167.7千人も減少している。

また、江差町観光の大きな特徴としては、宿泊客が大変少なく、殆どの観光入込客が日帰りであることがあげられる。年間観光入込客総数の平均6.3%しか宿泊していないのが現状である。これは、3.5観光客受け入れの課題でも多くの町民からあげられていたが、江差町は慢性的な宿泊施設不足に陥っており、8月の姥神さんの時期だけは全く客室が足りない状況になる。

しかし、地域経済が活況を呈していた時期は、十数軒もの宿泊施設が存在していたとのことであるが現在の状況では旅館ホテル業は成立しないと考える。姥神さんの時期に限った臨時簡易型宿泊施設や民泊、中心街の空き家の利活用などの対策を商店街や町の観光コンベンション協会などで早急に検討する必要がある。

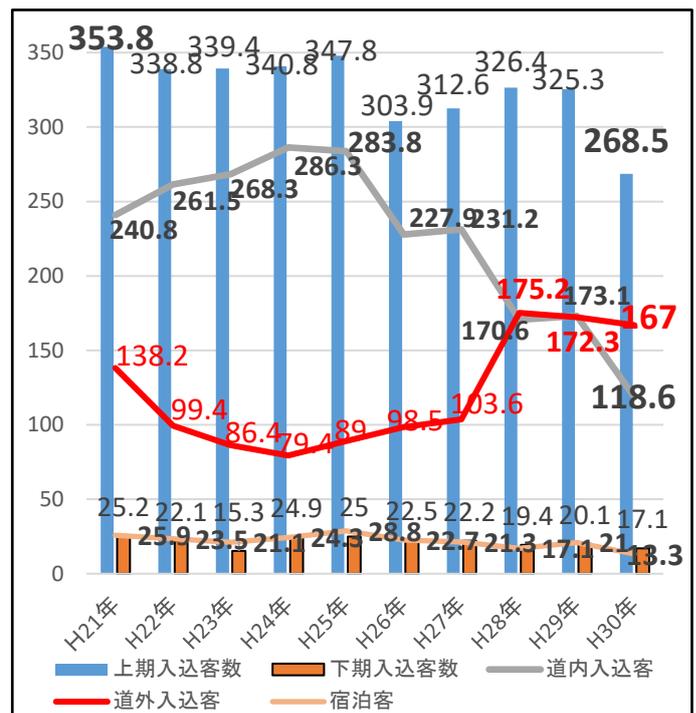


図19 最近の観光入込客動向

6. 関係者との意見交換と考察

平成28年5月の地元山車巡行関係者へのヒアリング調査に続く第2段として、平成29年4月に地元関係者と意見交換を実施した。その内容を以下の項目で整理し、筆者なりにこれからの姥神さんの持続可能性について考察してみた。

6.1 現開催運営体制になるまでプロセス

姥神さんが現在の開催運営の体制になった時期は、そんなに昔のことではないそうで、まだ30年から40年ほどしか経っていないとのことである。30歳代前に関わる山車が違う地元の数名の仲間と話し合い、これからの姥神さんはどのような方向へ進化、改善すべきか考えるために、参考になる全国のお祭りの事例を視察することから始めたそうである。当時の地元若衆チームの「もっと良い祭りにしたい」との思いで青森のねぶたをはじめ川越、佐原、高山、長崎くんちなどを視察して得た一つの改善策が山車の曳き回しに絡むことができる証としての半纏制作であった。

各町内で自分達の山車の半纏などを整備し始めたころから今の姥神さんに少しずつ近づき形が整っていき、現在の姥神大神宮祭典協賛実行委員会を中心とした管理運営システムが構築されたのである。

ここまで整備されてきたプロセスにおいては、大変な尽力を発揮して頂いた数名の親分衆＝地元名士の存在がとても大きかったそうである。

6.2 姥神さんの今後について

現在の江差町の少子高齢化と人口減少の急激な進捗状況では、姥神さん（13基の山車巡行）を末永く持続させることはかなり厳しいものがあると地元の誰しもが思っているとのことであった。

意見交換を実施した相手の現在の立場について詳しくは書けないが数年前に江差人なら誰もが憧れる山車巡行の最高責任者「頭取」の経験者である。そのような方との約2時間の意見交換の内容をまとめると、これからの姥神さんは、各町内の山車を中心とした自分たちのお祭りという誇りから一歩踏み出す必要があるということである。

それには、姥神さんを全町的な捉え方・関わり方に持っていく方向、すなわち観に来る、参加しに来てくれる人と共に姥神さんを大事に守り、支え合う関係性を築くことが重要になっていくものと考え、いかにして姥神さんや関連する商品等、催しや半纏、飲食、宿泊サービス、おもてなしで来訪者にも地元消費拡大に参加協力、協賛してもらい、山車巡行の関係者＝一時江差人として動いてもらうか、ということである。

7. まとめ

平成17年より毎年学生達を連れて江差町の姥神さんに参加し、現在ではアクティブラーニングの教育的実践の場としての位置付けも理解して頂き、協力頂いている。特に歴まち地区「いにしえ街道」を有する旧中心商店街の中歌町（蛭子山）の顧問や相談役、頭取をはじめとした若衆との交流から生まれる370有余年も続くこのお祭りの背景探り（現場調査）は、毎年いろいろな話が聞けてとても興味深い。

2019年（令和元年）で通算15回目の参加となる姥神さんでは、毎回意識して地元の様子や新たな語りを聴講することで持続可能性のヒントが少しずつ見えてきている。その一つが私達北科大生以外の大学生の姿が姥神さんで見られるようになってきたことがある。

その一つに2016年江差町と相互協力に関する協定を締結した北海道教育大学函館校の地域協働推進の取組みがある。2016年8月より毎年続けて2019年までの4回に渡り本町の山車：清正山の巡行と神輿行列に参加している。その他はこだてみらい大学や北大生チームも参加していると地元の重鎮から情報を得ている。一時期ではあるが本学建築学科の谷口ゼミ生も神輿行列に参加していた。

このように道内の大学から姥神さんに参加し、お祭りという地域文化資源の持続可能性について考える機会などが得られることは教員や学生にとって意義があると考え、しかし、世話してくれた江差人にとっては、神さんを体験した学生の一部でも江差ファンになり、社会人になっても毎年のように山車巡行に参加してくれるような展開になることを望んでいる。

また、姥神さん関係者の皆さんと議論したい持続可能性に関わるテーマも見えてきている。それは、夏休み期間に町外から姥神さんめがけて遊びに来る子ども達との交流、受け皿作りである。見たことも体験したこともないお祭りの幼児体験を通じて姥神さんの未来を開く、未来につながることになるのではないかと、いう仮説である。姥神さんに対する強い憧れと誇り、自信と絆は、まちづくりの持続に欠かせない要素である。

参考文献

- (1) 江差町：観光客入込数，2020年3月2日，
<https://www.hokkaido-esashi.jp/>
- (2) 江差町観光協会：江差姥神大神宮渡御祭「祭図録」，1999.
- (3) 北海道教育大学函館校：地域協働推進の取組み，2020年3月5日，<https://www.hokkyodai.ac.jp/>